



虎石 竹下義安集

平 溪中身は良相種念の右大相れおれぬ時
意根の別苗の四方に生る妻集の才未
如く一山は猶思ふ下と行後席よりありと
るむとあり種字あり別苗ありといひる母を
種元は猶とありむらげ集必集とありとあり
先ぞ依のあざいで又百れらえはとまるとり
むらせあひのいともあざらにえあやもは真弘

虎石

竹本義太夫正本

源家中興の良將。鎌倉の右大將頼朝公の御時。菅根の別當の御方には、往生要集の十樂を説き給へば。一山の僧兒喝食。いづれも席に連りて、オシ頭を傾け。シ、聴聞あり。地別當見室に向はせ給へば。聴衆は書物を繰廣げ朱なる筆を動かせり。是ぞ佛の會座にして五百の羅漢法を開き。悟をひらかせ給ひしも、フシながら。にこそ思はゆれ。地それ見佛聞法樂と云へるは。今此娑婆世界は佛を見法を聞く事甚だ難し。獅子吼菩薩の曰く。我無數百千劫の間無量の解脱の法を修して。今大聖釋迦牟尼佛を見奉る。此これ首龜の浮木に逢へるが如し。又儒童は全身を捨て、初めて半偈を得。常啼は肝腑を刻ん

で遠く般若を求めたり。菩薩さへ猶さんりければいかに況や凡夫をや。釋迦尊舍衛國にまします事廿五年。其間にかの九億の家三億は佛を見三億は纒に名を聞き。又三億は見す聞かず佛在世さへ猶然なり。まして滅後は云ふに足らず。故に法花に曰く。此諸の罪の衆生は惡業の因縁を以て阿僧祇劫を過せども。三寶の國に生れては常に彌陀佛を拜し奉り。信仰の法を聞く。清く飾りたる地の上に大なる菩提樹あり。枝葉四方に満ちて寶の咲ける木なり。其上に羅網を覆ひ。風に靡ける瓔珞は、フシ只妙法の響あり。普く是を聞く者は。深く悟を開きつ

つ不退轉に住すと云なり。末世の衆生いかでか此悟を聞くべけんや。只愚痴に返つて我名を修せば。刹那に至つて淨土に迎へん爲に我又希有の願を起す。佛無我の他力を頼りなば必ず斯くの如くなり。此念佛を信する者は。無量億劫の極重惡業を忽ちに滅し。命終つて後決定往生疑ひなしと、フシ既に講談満ちけり。佛別當の満座なれども。將軍御參詣あるべき旨、兼ねて御上使下さるれば今日を闕座とす。佛然る間明日より寶殿の莊嚴寺中の掃除、随分油斷あるべからずと。御座を立て給ひければ皆々。席をぞ、三、二、一、下らる。、。シ、頭は大呂の。佛末方只何となき宮寺も。浮世に轉るゝ年の暮寺中の兒の里々より。近附く春の初小袖様々の送物。師の御坊への捧げ物父の文母の文。

二つ三つ讀む兒もあり五つ六つ讀む兒もあり。下部男の物語。御養父入を必ずとナリわきてへ叫く方もあり。フシ爰に哀れを。止めしは河津の三郎祐重が乙若に。宮王丸と申せしも此御山にありけるが。父に遅れて其後是非なく母に付添ひて。曾我祐信が養子となり十歳餘りも暮せしが。幾程なくて祐信も世を早うし給ひけり。元來伊東が孫なれば御にくしみの強き故。本領も召上げられあるに甲斐なき身となれば。萬に添ふる貧しさに寺傍輩のゆゑしきを。稚心に羨みて泣くより。外の事ぞなき。然る所へ

鬼王はからくの送物。母上よりと文一つしをくとして差出す。宮王涙と諸共に御文を繰返し。鬼王に打向ひ扱も扱も口惜しや。異児達は父もあり兄弟とても仲能くて。折々毎に便りありいかなれば自らは。父に縁なきのみならず弟兄

達も憎むにや。二の宮の姉君も又は十郎祐成も。此程はかき絶えて文の傳さへフシなかりしぞや。いかなる事の御腹立ちぞ語れ間かんと責めければ。姉君様は此頃は御勞り。それ故便りもましまさず又兄上の十郎様。此程は宿通ひ中々晝夜の別なし。折々お諫め申せども止らせ給ふ氣色もなし。却つて御腹立候故何とも是非なく候と云ふ。宮王驚き手打つて。扱しなしたり。親の敵を狙ふ身の是はあるべき事ならず。必定仕損じ給ふべしエ、もどかしや腹立ちや。某かゝる身ならずばやはかお手には掛けまじきに。思ふに甲斐なき世の中やとスナテ掻き口説きて敷しが。暫くありて小聲になりヤレ爰に究竟一の事こそあれ。近々將軍二所御詣の御沙汰あり。然る上は敵祐經御供せではあるまじきぞ。何卒窺ひ一太刀恨み見性惡に鼻明

かせ。浮世の恨みを晴すべし併しいまだ敵の面を見知らず。よき折柄ぞ汝も山に逗留し。なりなん末を見つげやと主従心を合せつ。頼朝公の御成を今や。今やと三三へ待ち居たり。其日になれば。將軍家の御社參とて上下さゞめき渡りけり。扱御供の人々には和田山土肥岡崎。川越高里江戸豊嶋玉井小山宇津の宮。山名里見工藤の左衛門以上三百五十餘騎。花を折り紅葉を重ねし裝束綺羅一天を輝かし。陣頭に雲を覆ひ水干淨衣白直垂。布衣權勢はあたりを拂ふおよそ中間難色迄。氣色に色を盡しつゝ後陣の聲聞甲冑をよろひ。弓矢を帯する隨兵は上下に集ひ左右の帶刀二行に並び。御調度掛の人々は弓手馬手をぞ守護しける。鬼王を相具し御座所の後に隠れ。御供の人々彼は誰そはいかにと尋ねれば。鬼

王さん候君の左の一のお座。あれこそ秩父の重忠よ。君御一世の先陣役。日本無双の軍慮の達人。右の上座は三浦の義盛同子息義秀。扱其次は里見の源太豊嶋の冠者梶原平藏。扱又少し引下つて。半装束の珠敷を持ち、香の直垂着たるこそ。工藤左衛門祐經ぞ必ず見忘れ給ふなよ。縦ひ折よく候とも御前は憚り給へ。お夜詰なんどの歸るさに何卒窺ひ申すべし。某は是に候と。一間障子を隔てつゝ、暫く時をぞ移しける。然る折節祐經お次へ罷り出けるが。宮王に目を放さず。扱もく、此兒は眼の見返し面魂。正しく河津によく似たり若しさにてやと尋ねければ。宮王はつと思ひながら。いかにもそなるが何の御用はし候ぞ。祐經近々と立寄り。扱々父に似たる者かな。是は工藤左衛門祐經とて御分が父とは從兄弟にて。殿原達にも親しき者ぞ疾くにも逢は

ぬ本意なさよ。随分別當にかしづき給へ。弟子達多しと申せども此。祐經程の方人持ちたる人はあらじ。便宜よくば上様へもよき様に言上し。寺門訴訟の事あらば取次をして得ますべし。又折々は出入りつゝ。某が肩の支も摩られよ。身の爲悪くは思ふまじ且又兄の十郎も。常々に出入りて勝手をも取持ちなば。徒歩若黨とは呼ぶまじき家の子とこそ云ふべけれ。いはれざる僻を出し。殊更親の敵なんどと筋なき事を申すとなり。たとへば親の敵にもせよ。當時工藤の祐經を相手に取らん狙はんなどは蟻螂が斧なるべし。貧しき身にて他人に交り修羅を燃して暮さんより。文の序のあるならば必ず参れと申さるべし。扱も見参の初めなるにイデ引出物得させんと。赤木の柄に銅金入りたる。刀一腰取出し。宮王にこそ取らせけれ。只何となく請

取れども。初対面の言葉の末胸に逼つて口惜しきスエチおろく涙に身震ひし。只折よくば一刀刺さんずものをと勇めども。大の男の目も放さず忍びの柄に手をかけて。間近く居寄れば是非もなく。もぢくとして叩へける。心の内こそせつなけれ。次に叩へし鬼王は。餘りの無念にせき狂ひ障子一重に立隠れ。身もがき齒齧みをなし。泣くより外の重ぞなき。かゝる折節御前より同胞一人立出で。選御は御船候ぞ早御立と囁れけるにぞ。そこゝに暇乞ひ祐經御前に上りけり。宮王今はたまり兼ね。ずはと抜いて追掛くるを鬼王袂に絶り着き。コハ物に狂はせ給ふか御前近くの太刀三昧。若し見咎められ給ひなば何と悔むと甲斐あらじ。コレ九層の臺は累土より起り。千里の行は一步より初まると。功積らでは中々敵は討たれぬものぞ。構ひ

て思ひ止まり給へと。理を盡し詞を並べ
様々賺せば眞王も。涙ながらに止まりし
が又立歸り牙を嚙み。月こそ日こそ變
るともおのれ討たでや置くべきか。やれ

鬼王よ舍利々々佛になるとても中々出家
は遂げられまじ。法師の御不興を蒙ると
も佛の罰が當るとも。それはそれからそ
れ迄よ最早堪忍なり難し。供せよ曾我へ
下りつゝ兎にも角にもなるべきと。思ひ
定むる心中便しく。も亦 三遍 へいさぎ
よし。

フシ還御を誘ふ。地色鐘の音も臆々と告げ
渡り。夕日山に端隠れてこぼすが如く茜
さす。波紅に染めしなり君の召さるゝ御
船は。大船數多組合せ下白の大幕に。無
双の武器を立並べ。鎖まり返つて漕ぎ
つれたり。地色御船頭の藤平は御免を蒙り
櫓に上り。やら目出度いと言祝けば艫船
の水主聲を揃へ。皆同音に奏でける。そ

もく船の起りといつば。その上黄帝の
御代に當つて蚩尤といへる逆臣あり。鳥
江の海を隔て立籠れば。何と攻むべき
フシ様もなし。帝是に宸襟を痛ましめ。空

しく數日を送らせ給ふ臣下の貨狄是を悲
しみ。寢所に入つて心を結ぶ。ある時貨
狄庭上の。池の面を見渡せば折節秋の末
なるに。寒き風に散る柳の一葉水に浮び
しに。又蜘蛛といふ蟲も虚空に落ちけ
るが其一葉の上に乗移り。次第々々にさ
さがにのいと果なくも柳の葉を。吹き來
る風に誘はれ。汀に寄りし秋霧の。立ち
くる蜘蛛の振舞げにもと思ひ初めしより
工みて船をフシ造れり。黄帝是に召され。

かの海上を漕ぎ渡り逆徒を易く打亡し。
御代を治め給ふ事。壹萬八千歳とか
や。然れば船の。船の字を君にすゝむと
書き傳ふ又。一葉と申せしも。此時よ
りの例なり。百船千船。萬の船の遠津

船。稀に見ぬ目の浦小船。いかなる風を
待船や色の港の泊船。岡の遊君が呼びか
くる。舟戀しゆかしの松浦船亮。出て見
上様ぢやげなさまで。ワキないぞや。女我

方のナホテ寄るべは。ニハシ絶えて荒磯の。
外行く船と答ふるは又押隠し恨みても。
なほ浮船の憂身ぞと。うきを較ぶる。海
士小舟。宿も定めぬ沖津船。洲崎の波に
隔たりて。フシ相見ぬ夜半の友船を。慕ふ
船とや下心通ふ船とや通へとや。戀の舟
橋渡れとや渡り較べて。今ぞ知る。阿波

の鳴戸も。波風の風げばぞ出づる釣小
船。櫂の雲に袖濡らす仇を。恨みて泣き
戀ふる。涙の底の落標。身を盡しても
逢はんとぞ。思ふ思ひの焦れ船遺潮ない
ぞの片割や。かたゝな船に棹させば身は
捨舟と思ひきや。いと心早瀬川オクリ
高瀬に。漕む綱手繩。引く手數多の繁け
れば。取来よやくと。招かぬ。ヤア。

船も。戀の繩。手と。ヤア来てかゝ。
ナホスるや、フシ船より船に。いつとなく。
夜を重ね行く提枕。長夢の浮世と繋りがさ
る船と較ぶる身の程も末は願ひの綱解け
て。御法の船の水馴棹さすやましほの。
連れて行く目出度き君が御座船は、フシ龍
頭御舟。とこそ誦ひけれ。

地折節十郎祐成は二所御詣を幸ひに。
何卒敵を討たばやと焦れ焦るゝ釣小舟。
蓑笠取つて打ちかづき。弓矢は苦に押包
み、フシ波間を分けて狙ひ寄る。地折節早
くも見咎め船槳に突立ち上り。ヤア何
奴の舟なるぞ。此度の御參詣凡そ日本に
隠れなく。前日より船留あり笹の葉程の
舟もなし。扱は海賊なりけるなあれ打殺
せ射殺せと。地折片手矢はげて駆廻る祐成
寢おびれたる風情にて。全く存ぜし事
ならず。是は相摸川の獵船にて候が漁炬
に疲れ候故。漂標に舟を紡ひつけ暫く休

み候が。續ほど候らん是迄流れ参りし
なり。地折眞平御免と詫びながら。首尾よ
くば一矢射て水底に飛入らんと。弓と矢
探り寄せにける、フシ心の内こそ不敵なれ。
地折祐經いよく合點せず、いや、おの
れは儲か鎌倉にて折々見たる面貌ぞ。す
は平家方の討洩されか。地折但し叛逆の與
黨等か二つ一つは定のもの。射捕れ、

といふ程こそあれ既に危く見えてげり。
和田も秩父も互にそれと知り給へば。
ヤレ待て方々漁船には極つたり。御物詣
の折なれば上にも御赦免候べしと漸くに
紛らはし。おのれ狼狽者の慮外奴。御目
通り見苦し罷り退れと叱らるれば。祐經
堪へずイヤサ。かゝる怪しき紛れ者は此
左衛門が吟味の役。方々お構ひあるべか
らず。人々肩を持たるゝは但し叛逆海賊
の同類かと座を打つて罵つたり。地折時
朝比奈堪へぬ若者。祐經が膝にとつかと

居掛り。コレサ祐經。諸侍の出合に叛
逆盗人の同類とは。近頃以つて舌長しサ
ア今一言吐出せ。地折船中より蹴落して水
呑ませんと云ふ内にも。いやまだそこを
逃げ去らぬか。イザ物見せてくれんとて
權追取つて散々に打伏せ。おのれ無念
にあるべきな。地折併し命が物種此場を逃
れ。又ぞや魚を追ひ廻せ一度は綱にかゝ
るものぞ。エ、浅ましの世渡りやと。わ
きて得云はぬ朝比奈が、フシ心遣ひぞ頼も
しき。地折十郎涙にくれながらコハ忝き御
助け。何時の世にかは忘れんと。袂を顔
に押當て、フシいづちともなく流れ行く。

地折所に夕波逆巻き上り風は枯木を吹き
折り、落つるが如き雨雲は白日俄に
暗闇みて凄じかりける。三疊へ景色なり
地折藤平體船を走り廻つて面舵取舵下れ下
れと働けども。叶ふべきとは見えざりけ
りあら笑止や。アノ一疊の山嵐箱根足

柄の方へ吹き廻らば。此御船の陸地に着くべき様もなし。人々心中に御祈念候へいかに秩父殿。此御船には妖怪が付きて候。重忠ア、暫く。左様の事を船中にては申さぬものぞ。地へあらず不思議や雲間を見れば。西國にて亡びし平家の一門雲波に乗じて出たりけり。縦ひ悪寒恨みをなすともそも何事のあるべきぞや。悪逆無道の其積り神明佛陀の冥感に背き。

天命に沈みし平氏の一類主上を始め奉り。一門の月卿雲霞の如く。光り渡つて見えたりしが。又空中より雷火の光波を蹴立て。魔風を吹きかけ眼も眩み前後を忘るるへばかりなり。時に朝比奈矢束解き捨て。重藤の真中握つて突立ち上り。大の雁股打番ひ鏡に等しき眼を見開き。いやをこがましや平家の一門。生きて働く時にだに源氏の矢先にたまたぬもの。ましてや死靈の分際物の數

とは思はぬぞ。義秀が矢先にかゝつて閻魔の廳に訴へよ。一つの罪は通るべしんと差取り引詰め射たりけり。さしもの悪寒朝比奈が弓勢にて次第く遠ざかれば。重忠舟子に力を合せお船を。漕ぎのけ汀に寄すれば猶怨靈の姿も薄く。消えて雲井はほのくんと疎く。空とぞなりにける

第二

善をなすこと富家は易し孝をなすこと貧家は難し。爰に平家の侍伊賀の平内左衛門が獨姫。豊とて人のいとしがる。生れながらの京育ち。卑しからざる姿なり。然るに父の左衛門は平家崩れの其後も。都に忍び居たりしが。聊の事あつて三浦の與一に討たせしより。人と成るにも従ひて女ながらも憤り。父が敵を討たばやと。思ふ心の遺瀬なく。相傳

の若侍栗矢の三太に誘はれ。奉公人と偽りて鎌倉近く入り込み。旅泊の枕明け暮れとツシ事を。窺ひ居たりしが。敵の與一は家當みて常打つ時も四五十騎。百騎餘りの勢なればたよるべき様あらざりけり。ある時栗矢御側に立寄り密々申し上げけるは。誠に長々の旅泊心を盡し。路銀を失ふばかりにて敵に近づく事もなし。つら／＼事を存するに抑も此二つの命と申すは。忠孝のために擲ち候上は少しも厭ふ所はなし。さるに依つて此家の主を頼み。君を一先づ假坂の遊君となし奉る。疾くにも申し上げ度く候へども。若し御歎きもしや深からんと只今申し上ぐるなり。追付け御供申さんにとく／＼御用意候べし。はた又某儀は存する旨候て。會我の十郎祐成と申す浪人方へ。下稚奉公様ぎ候コレ御覽候へ。斯様に奴と愛身を宴し今日目見え仕

り。明日よりの勤つとにて團三郎と呼べるゝなり。此主人祐成事。大磯の虎とやらんに深く馴染み。日毎に通ひ候由。然らば某も供仕らでは候まじ。君は流ながの御身なれば。關東方の大名には度々出合ひ給ふなり。何卒與一に廻りも合せ給ひなば。よき程にあしらひ御文一つ給はるべし。某共に駆入つて本望達し申すべし。必ずぬからせ給ふなと申し入るれば。姫君は御涙にくれながら。とてもかくても此命敵たぐに擲なつ事なれば。惜しむべきにはあらぬども。終つひに一度も殿と寝す枕一度も取らぬ身が。夜なく毎に閨替ぬかへて辛くるい勤をするならば。エエやほか。命のあるべきか。エ、口惜しや淺ましや。何時の月日に生れ合ひ今此憂身は何事ぞ。とても奉公するならば。水仕に代へてくれよとて。恨み。歎かせ給ひけり。粟矢も涙は浮べども心弱くて叶はじと。聲

を荒らげ怒りをなしエ、御卑怯ひくたなり未練なり。何と初めより御命捨てんとは宜はぬか。其御心にて何とて敵が討たるべき。貴からずして高位に交はるは是遊君のならひ。水仕奉公を勤めて大名にたよらるべきか。コレ口惜しとは宜へども。傾城かやの種ぞとて外にも時かぬものなるぞ。海道一と名に立つる大磯の虎を御覽みぜ。母は玉屋の長者父は東の流人伏見の大納言實基卿の娘ならずや。いづれも故あり思ひありさのみな穢きたなみ給ひそと。様々さまざま賺うし参らせり早や御出と勤むるにも。共に涙のせきかくる袖そでの。柵しほ懸かけてけり。けに去るものは。日に疎しと申せども。恩愛いんあい妹背いもせの其中は世に睦まじきものなりけり。父に遅れし年月や十三年の春を迎へ。彼岸七日の満みる日に弔なふ日當らせ給ふとて。母上の思おもひ立ち宿坊しゆくぼうにての御佛事ごぶつじ。月は取越す

心かな。斯かくて十郎祐成も。心ばかりの手向草てむかぐさ一枝折つて手に結ぶ。露の白玉たまご繰り捨て、思ひ入つたる道のべの。末の小川に投げ渡す。橋はしのへ半なに行きかゝる。折節せつせつに豊姫も何心なく渡り合ふ。潮に打掛くる水の音岩に堰せきかれて颯々さつさつと。橋轟とどろげば、眩くらき思はず知らず祐成の。袂たもとにひしと取付きてア、恐おそやの。既に落おちようとしたほんに。危あやい事やと寒さむく目に。男見たのも戀なれや。十郎姫をじつと抱へ。扱あ々危あやき御事かな。某斯くかて候はずばやはか御命あるべきや。御覽みの如く一人さへ行きなづみぬる思ひ川が深ふかき懸路かけぢの懸橋かけはしを君諸きみ共どもに行逢いひの。袖そで振り合すも他生の縁ゆかり鬼おににも角つがひにも君がため。所詮たし某川波かがに。落おちてなりとも憎にくからぬ。人をこなたへ来きさせんと。いふ言の葉はにチャクトチャクト緋ひリエ、譯わけもない。一人落ちたは仇波あかの。立添たふ波なみもあら波なみの

男波ばかりはかた波の。甲斐も落の磯の波。誰そ寄せまいかはしら波の。寄るべ定めぬ女波ばかりのこがるゝを。共にと誘ふ波あらば。連れて浮名の立つ波も。ッソ厭ひはせじと夕波に。潮詞濁れば十郎も憂を忘れて寄る波の。瀬に落合ふが如くにて水も漏すな漏まじの互に影を水鏡。ア、恥かしと立つたるは。ッソ命を賣付く佛や。別れ兼ねつる。休らひに。栗栗の三太追つきていざさせ給へと勤むるを。十郎つくく打眺めヤア。汝は先程の奉公人團三郎と云ひし者な。シテ只今は何のため。又是なるはいかなる御方なりけるぞ。さん候是は某同國の人。父もなく母もなく浮世に便りなき身とて。某を頼みに奉公稼がれ候が。漸く今日相極り。即ち假靴坂の長が許へと云ひければ十郎打領き。扱は廓のお望みなム、聞えたりく。定めて粹な男をお見

立の色道修行のためならん。最早禿の盛りは過ぐる。よき突出しの新造様と引く手数多の繁からん。然らばあの里より間暇とお隙はあるまいに。いかと思ふ團三郎。町の名残も今日ばかりいづ方へぞお供して。何と一献波むまいかハテ廓への御越しは。暮方からがよい筈と勧め給へば姫君も、面差げに打笑みて。誠に粹な男とは。方様などの事ならん若しも御縁のあるならば。廓で御目にかゝるべし先づ今日はとありければ。祐成重ねて袂を叩へ。それはつれなしさりとは暫しの憂も忘草。露の命のある内は色と酒とが楽しみよ。いさこなたへと手を取つて行くも。歸るも三ヶ川岸やッ流れを前に。引請けて盃すく暮の内。いづちの誰が假居ぞと足早に行き過ぐるを。暫しと呼びかけて。若黨四五人祐成の側に寄り。是は工藤左衛

門祐經が使の者。主人申され候は御通りのやう見請け候。幸ひ色あるお連もあり暮も淋しう候へば。とうく御入りありて御酒一つとぞ申しける。折こそあらめ時こそあらめ。父が日に女を連れて敵と逢ひ。かゝる難儀に遇ふ事よ。さりながらさのみ女に縁はなし捨て、斬り込み差違へ。兎にも角にもなるべきかイヤマテ五郎が恨みもあらん。よし一先づ此場を逃れ。是非歸るさを討つて取らんと思ひ定め。さらぬ體にてコレくお使。左衛門殿へ申されうは。御遊山の儀存じよらず一禮もなく。罷り通り候處に。却つて御怒の御使忝く存するなり。御覽の如く足弱を連れ罷り通り候條。得こそは参り候はめ。何様重ねて参會の砌申し達し候べきと。慇懃に相述べて行かんとするを引止め。いやく御酒もすがり

になり御座敷も事冷めたり。●●然らば御邊は兎も角も。女中は残して御越しあれとッしいかつ。がましく云ひければ。●●祐祐成大きに氣色を損じイヤ推參なりおのれ等。主人を差置き云はれざる差配だて。サア今一言ぼさいて見よ。●●素頭を斬り割らんと反打ち直せば。●●若黨ども。前後左右に詰めかけて既に事にやなりてんと。思ふ所へ朝比奈は幕の内よりつつと出で。●●イヤ出來まするよ十郎殿。先づ今日は何時の日ぞ。父河津殿の命日ならすや。それに得知れぬ女を連れ尾籠千萬見苦し。其上是より川上には工藤左衛門祐經を始め。土肥新聞梶原源太川狩遊びに道を塞ぐ。某爰になりせばうかうかと行きかゝり。まつ此如く難儀に遇ひ殊更五郎は連れられず。●●●●本望遂げぬ事のみか所々の死をして。長き浮世の物咄いやはや笑止千萬なり。急いではより歸

るべし此度は折よからず。●●●●生中の思ひ立ち返すくもあるべからず早とくとありければ。●●祐成涙をはらくと流し。●●誠に度々の御情何時の世には忘るべき。父存命の一言を承る心地してエテ世に有難く存すなり。●●且又是なる女が事。色に溺れて召連れたるにて候はず。家來剛三郎が同國の者。父母共に死して別れ便なき身と彼を頼み。明日よりは廓の勤め十年花見ぬ不便さに。●●せめては町の名残りを惜しませ取らせ申さんため。是迄召連れ候なり。●●全く事を忘るゝにあらず。且は亡父の命日たる故是も一つの善根と。云はれぬ心の了簡にて由なき者を同道し。●●かゝる御咎めに逢ひ候段。御心底の程近頃以つて恥かしと。●●差俯向いてぞ居たりける。●●義秀げにもと思ひながらわざと怒れる聲音を上げ。●●イヤサ祐成其言分は立たぬ。

誠孝行の善心あらば鐵石より堅くとも。親の敵の首を討つて尊靈に手向けてこそ。善とも孝とも言ふべけれ。何ぞや女を見てはめろく。と吠面かく侍か。なま見られぬ後生だて臆れたり。●●色それ程血腰を抜かしては腐り落ちうはいさ知らず。敵の首はよも落ちじ扱もまだるしもどかし。●●コレ面取をかゝされて少し無念の心あらば。敵を討つて見せられよ。●●それ迄の對面はふつ。叶ひ申さぬと。大きにせいて怒らるればさしもの祐成詞なく。手持ち不沙汰に打連れてッしほくとして歸らる。後姿を見送りて鬼を欺く義秀も。袂を顔に押當て、さりとは頼もしや。可愛の者の心根や花の様なる若者が。親の敵を持たずんば理非は格別聞き憎き。今の詞はよも聞かじ。初めての女の前さぞ恥かしく思ふらめ云はねど面に見えけるもの。エ、言ひ

過したる悔しさよ許してくれよ十郎殿。是皆吾殿が爲なるを腹ばし立てゝくるゝなど。延び上りては眺めやる。心ばかりをさらばにて別れ。別れに 三浦へなりて行く。フシ其頃宮下。第十七歳山を下りて其後は北條殿にて元服し。時政の烏帽子子とて曾我五郎平の時致と名乗りしが。山寺育ちの稚兒上り縁残りて憎氣なき。角前髪つんばりの寝亂れは、枕ゆかしき風情なり。時致時致つくづく思ふやう。親の敵を狙ふ身の斯く迄非力ひぢりに生れ付き。晴業手詰責合の勝負覺束なしと。思ふ心を一筋に二所權現を祈らんと。オクリ浸るやへ水の酒さけ川。一七日の力乞ひなどか納受なまひなからんや。四方に幣帛切つて押立て。不淨を拂ふ薊高の。珠敷さらりと押揉んで。コハリ慙愧しんき懺悔ざんげ六根罪障ろくこんざいしょうおしめの八大金剛童子はつたうじん南無千手眼大菩薩。一つの験しんを見せしめ給へ。さなきに於ては

時致が一命。立ち所にオヌ取らせ給へと貴掛け。三浦へ祈りけり。不思議や川波。しきりに巻き上げ水は頭頂を打越え。石こそ流れかゝりけれ。時致驚き川上へ突退け。しけれど。猶し流れば止まざりけり。コハ行法の妨げよと。何心なく搔掴みエいと云うて差上げ。崎の岩に打付ければ二つに割れて石火の光。不動の尊像現れて。虚空に。上らせ給ひけり。時致餘りに有難く猶々諸願成就と。御禮拵離の水淨くかゝる所に誰ともなく。川上に馬乗入れすそ冷させて踏み濁す。時致興覺め顔振上げ。ヤレ狼狽へ馬鹿の生盲目。行者のあるを知らざるか。川下へ廻れ。と聲かくれば侍どもせよら笑ひ。いやはや口の過ぎたる小山伏。ほでてんがうを乾かずともコレヤ御當家一の御前よし。工藤左衛門祐經の御馬のすそ。波んで戻りて載かせ

よ。少々きつい瘡でも影もないぞとわめきつ。馬乗連れ。渡りけり時致元來堪へぬ若者。馬の尾筒をしつかと取り。ハテ初めての見参によき呪を相傳あり忝く存するなり。是は曾我の五郎院時致坊といふ山伏。我等が家の秘法なれど。只今の返禮に下馬落しと云ふ事を少し教へて參らせんと。別足取つて跳ね倒せば。馬人ともに川中や水の深みに打込んだり。残る者ども肝を消し手綱搔繰り行方は。いづちともなく失せてげり。時致逃げば逃げまゝと取つて返せば月毛の駒。川岸に突立ち上り身震ひしてこそ立つたりけれ。五郎に付こと打笑ひ是ぞ吉左右敵の馬。只一馬場とひらりと乗り逆巻く波に颯々さ。さつと駈入り駈上りしづくと歩ませて。曾我の里へと歸る波みぎは勝りの力とは。此行力と今の世も語り。傳へて書きとむ

第三

鼠は神社に憑りて貴し狐は城廓に入りて勢ひあり。されば工藤の祐經は君の御覺え目出度きに誇つて。威を一天に輝し榮花を極め居たりけり。其頃又備前の國。吉備津宮の大藤内と云ふ者あり。左衛門を頼みに聊か訴訟の事あつて。在鎌倉してけるを祐經密かに招き寄せ。扱も其武運に叶ひ當君の御機嫌に預り。今頃天下に肩を並ぶる者もなく活計歡樂に暮すなり。併し爰に祐經が身に於いて一つの難儀出來せり。故をいかんと申すに。例へば同じ一族に河津の三郎祐重と云つし者。家督横領の恨みありて某が家來近江八幡に申し付け。狩場の歸りを窺ひ只一矢にて射殺したり。其子供成長して某を付け狙ふ。兄弟ともに智勇に長じ事六ヶ敷奴原なり。其上鎌倉に方人數

多はある由晝夜心に油斷なし。さるに依つて某見事な智慧を用し。彼奴原を亡す思案を拵へたり。何と御分も此儀に同心あるべきやと小聲になつて云ひければ。藤内もとより浮氣者コハ口惜しき仰せや候。縦ひ一命を參らせても此度の御厚恩に代へらるべきか。唯本國神祇の御罰を蒙る法もあれ。全く違背あるべからずと請合へば。祐經打領きテ、近頃過分過分。扱其手段と云つば。かの兄弟この頃は錢なしの市立と。大磯の宿通ひ虎少將に譯ある由。何卒其方三浦の與一を唆し。二人の内いづれになりとも逢はされよ。其かの與一と兄弟は常々に仲よからず。何卒競合の買論にて彼奴等を與一に討たさるべし。さすれば御分も某も抜かぬ太刀の高名ぞ。縦ひ與一を勤むるとも御身行かでは益もなし。コリヤ後詰は某ぞと。黄金數多投げ出せば大藤内き

よつとして。コレハノ々や。唯先金取つての色狂ひ白癩唐にもあるまいと。行かぬ先より廓口はや駈け出せばア、是是。我物入らぬと思ひつゝ滅多に過しせらるゝな。ちと折々は手もめも大事ない事と互に。笑ひて三行末は。扱も浮世の。浮名川。色の柵かけてけり。流れもやらで潮に激む。人の心の波寄せて深き思ひとなりけり。故をゆかりて大磯と。どの色人や付けぬらん。いづれ戀路は多けれど是魂の捨て所。智あるも愚なりけるもオウリ心の外の迷ひなり。斯くて十郎祐成は何時しか虎に譯深く。誓ひ置きにし言の葉の末を粹と世の誹の親の諫めもわざくれて目を重ね夜を籠むる。其通ひ路や現れし那にばつと沙汰あつて。間夫の男と名に立つるよしやさがなしよしや只。逢ふにかへすやありなんと。今日もかし

こに浮れ来る。●●頃は彌生やよいの中空や四方の霞は晴渡り。●●糸遊いとあそぶ庭の面。咲きも残らず散りも初めぬ木の下に。振袖着せて笠着せてあどなや花に置く案山子。女子心の優しさと暫く眺め佇みしが。●十郎つくく思ひけるは。誠に某大事の身を持ちながら。日毎に通ふ情の道は迷ふまいものでなし。●●併し人心武夫さへも變じ易し。まして勤の身にしあれば又我ならぬ外心。女は萬淺はかにて。思ひ立ちぬる事どもの障りとならんもいさ知らず。●●殊更頃日は三浦の與一通ふ由某とは仲よからず。連は備前の大藤内これ祐經と親しき仲。何とも是は合點行かず。若しは祐經一座をせまいものでなし。かたぐい以つて訝しきに●●扱幸ひと案山子衣。肩に打掛け笠かぶり。暫し様子を窺ひける。●●頓智のへ程こそゆゆしけれ。●●とは知らずして。虎御前。

●●此程は打續いて三浦くくと繋がれて。面白からぬ●●き日數。●●夜晝わかぬ身の勤め。朝込よりの附入に。今日も變らぬ戀の宿二階小座敷爰こそよ。●●日移よしと身仕舞ひて日にく櫛の挿替る模様はちびにわかてども。是非に變らぬ物とては。庵木瓜の陰日向かげむか冷風一つ。鏡に。影映す。月雪花は何ならん。見度いは人の佛と●●鏡。取り置き手づからや。硯引寄せ筆染めて延紙の綴文あたまから。一つとしたる其下は。●●今日の勤の附屑。●●扱其次にわし事と只打付けに書きたるは。●●勤の外印なり。●●其折節に海道を香香繁く打つて通る。●●虎暫し筆をとめあれは誰そやと尋ねれば。引舟の小衣は衣の香とめて居たりしが。さん候先陣は横山黨。後陣は名古屋の殿様とやらん申すと答ふれば。●●あはれげに此殿達の馬鞍鎧腹巻を。わらはにほんとはず

めかし●●ならぬ事かと戯れば。●●爰な太夫様。扱も似合ぬ願事何のためにと云ひければ。●●ハテ皆主様に參らせて。思ふ事をとくどからず。●●跡は。涙にくれければ。●●小衣は譯知らず。問夫の男はあれ程に可愛物かとつぶやけば。●●たしなみやほんに文盲な。勤は勤戀は戀いかう譯あるものぞいの。少し教へてやり度い迄。それはそのくいとしさは寢ても起きても止め難し。●●思ひ切らうと思ふ程猶し増し来る物思ひ。夜々毎の通ひ路も逢うて戻せし別れには。其移香を其儘に。●●抱いて寝ねしてゐる心。逢はで去なせし其時は外へも寄りてましますか。又異戀を稼ぐかと少しは妬む心もあり。道の程内の首尾いかゞと思ふ心やら。高い上から後飛び落つる様なる夢を見て。●●扱も其夜の寢苦しさ。●●とやららん。かくやわたらせ給ふぞと。●●枕

の乾く隙もなし。世には男もないやうに勤むる客を差置いて。貧な男の可愛きは是も。因果の内ならん。其外萬氣配りのせつない事を思へばや。戀のないのも増えらんと。又喰ひしめす命毛の末はかしくと書止め。筆もやらぬに藤内三浦亭主諸共入り集ひ。コレ〜虎様文見たぞ。上書見たし封目は。定めて木瓜の御判ならめと云ひければ。エ、悪戯なさうした事は氣もない事。見度くとちつとなりますまいと押隠す。藤内も云ひかゝりコレ唐迄も見ると。飛んでかゝればとんと捨て。素知らぬ。顔して居たりけり。與一大きにむつとがり。これ〜藤内。何も勤の事なれば文書かゝは道理よ。併し上書見せぬ文とあればちと心にかゝるなり。サアサアどうぞあの文を止めて見る事なるまいか。虎聞きも敢へずアウいやオカシヤ

ンセ。此里に住む内は千も萬も百萬も。書かねばならぬと氣をもたす。一も今はせき上げて八幡止めて見せ申さん。ヤイサ亭主。爰をば汝了簡せよ。何と黄金と背較べさせ虎を生捕る分別はあるまいか。亭主悦び手を打ちて。何がさて〜お大名の仰せなれば長も否とや申されまじ。併し虎様のお心はと云ひければ。自らとて此里の花に心の残りはせじ。それが實にて候は。鎌倉の御所櫻。見たい事ちやとほのめかす。亭主夫婦は目出度がりサア御嫁入は濟んだもの。お立ちは我等が屋臺より御門出の御盃。それ御乗物の御用意せよと舞けば。藤内三浦口を揃へ亭主は大きな素人かな。さうした姿は古めかし。つき〜は跡や先こちとはは深編笠。虎を先に押立て。千里が野邊でも平押しぞ。西は田の畔危い合點ちやこなたへと。先に

進めば虎は猶。今更心にこたへ来て急な事ちやと行悩む。廊下の端にすつくりとヌズ。涙は襟に押隠す。亭主が入れば禿を越す禿戻せば引舟は。はや御出でと呼び立つる上する女子の洒落聲は。耳を擦りてかしがまし。風の物云ふ世なりせば。斯くと告げてもやらなに。曾我へと吹く風あれど。物を云はねば。せんもなや。物言はぬ役こそ案山子〜なれ。堪へ兼ねつゝ十郎は大汗流し氣をまがき。扱も〜四つ足の畜生め。數通の起請は何のためぞ。討つて捨てんと狂ひしがいや待て彼は遊びもの。もとより斯うある筈の事。恨むは却つてこなたの恥。さりながらとてもの事に様子を見届け歸らんと。常の。へ如くに入りけり。身は習しよ。豊姫は何時の間にやらついで馴れて。髪も身振りも物腰も廓の水に洒落て住む。憂き

ふしの身や假粧坂少將と名に呼ばれ。突
出しの初戀より五郎に深く言交す。今日
も逢瀬を樂しみに。待つは辛いと云はぬ
ばかりの闇の内。色折柄祐成入りけれ
ば。少將は嬉しくもよくこそ御入りと
ヌテ世に睦ましく寄添ひて。何とやら
御風情只ならず。何事ばし氣懸りや口舌
かと尋ぬれば。十郎包むに暇なくありし
次第を語りぬれば。何虎様の御客は三浦
の興一さふらふな。南無三寶口惜しや
身請とあらば此里へ。最早ふつゝ見え
まいがコハ何とせん淺ましや。時致様は
など遅きぞ團三郎は來ぬ事かと。立つて
見居て見泣きて見つ。更に性根はあら
ざりき。十郎も興を覺まし。是はマ
ア何の眞似ぞとありければ。さん候お兄
弟の仲なれば明かしましても苦しから
ず。斯様／＼の仔細にて時致様とは豫
ね／＼申し合せしなり。どうぞ討たせて

給はれと。涙を流し語りぬれば。十
郎聞きも敢へず何三浦の興一は敵とや。
扱はそなたが平家の侍。伊賀の平内左衛
門の息女豊姫な。團三郎は家來栗矢の三
太とや。扱も女ながら頼もし
し。何がさて／＼五郎が爲には男の敵。某
がためには差當つての女敵。殊には又意
趣ある仲かた／＼以て捨てられず。いか
にも／＼助太刀討つて參らすべし。併し
五郎が思はん所もあり。今暫く待ち給へ
ざりとては痛はし。思ひも同じ思ひな
り何しに見捨て申さんと互の心を較べ合
ひ。思はずひしと抱き付き泣くより
外の事ぞなき。虎は舌が呷きに見えし
とばかりが嬉しくて。座敷の首尾を窺ひ
／＼かしこへ忍び來りしが。この有様を
見るからにくわつとせき來る妬みの袂。
抜きかけながら祐成の胸づくしに縋り
付き。コレ男畜生惡性者。廓に女郎が

切れはせじ現在弟に逢ふ人に。是がま
ある事か斯うした事はつゆ知らず。う
か／＼とたらされて此年月の憂き苦勞。
海とも山とも賢ふべきか。アノ心中盗人
物知らず女郎の罰は當らぬものか。常々
頼む愛染様扱結構な護りやう。夏書夏花
は何のため。返させ給へと掻き口説き
佛を。恨み身を詫つ涙は。袖に朽ちぬ
べし。虎は漸く顔振上げ。コレそこな
人。女郎は互の事なるに男早は行くまい
し。人の戀をば寝取らずと勤ばかりをし
て居や。ハテ入らぬお構ひの。それ程
大事の男ならどうぞ仕様もあらう事。人
恨みずと身を恨みたがい筈と。悪女心
の一筋に敵の女と思ふにや。聲高に云ひ
募れば十郎は笑止がり。コレ少將殿。
入らざる詞がらかひや。又虎殿も大人氣
なし。但し身請の目出度さに酒が過ぎ
たか扱は又。奥様風を吹かさるゝか。

張りが強いとせかすれば、アム、扱は身請の面當に斯うした事をし給ふな。勘那出るのは誰がためぞ。是皆御身のためならずや。逢ひた見たさは戀の科内からせて逢はせねば。思はぬはまり身に積り。末々は方様のお世話になるが悲しさに。それ故三浦へ参るなり縦ひかしこへ行きたりとも。心地煩ひ物狂はしく偽りなば。いかな男も秋風の吹く頃迄に愛想盡き。暇くるゝは見えた事それを頼みに暫しの別れを思ひ切りしぞや。此事告げん其爲めに文は認め置きたりと。祐成の膝に置き口説き立つれば突倒し。アイヤサ見度うもない。文の届けは常の事はでおのれが言譯立つか。死傾城の糞強盜。筆と紙に言譯させ見事に心中立てんとや。素人はめた癖失せすいやはや餘りで可笑しいと。せゝら笑うて立つ所を髻を取つて引倒し。コレ餘程がよいぞい

の。假にも妻と呼ばれては立たぬ所のありと思ひ。とくより立て、置きしぞや。是見くされとかなぐりつ。島田ながらに打付けて、ッ返す袂ぞ涙なる。惣祐成も少將も扱は左様にましますか。こなたの譯は斯うした事必ず疑ひ咄れ給へと。互に胸を懺悔ぬる、ッ末も涙は止まらず。トかゝる所へ五郎時致團三郎諸共に。何心なく入りにけりもとより差合ひくらぬ。仲。斯様くくと云ひければそれ何よりも易かんめれ。ア首踏み折つて捨て申さんと飛んで出るをやれ待て時致。是にて狼藉に及びなば一つは亭主が難儀なり。ト又こなたにも大事あり兎角彼奴等を遣り過し。道にて討つて取るべき間面々其旨心得べし。先づく虎は座敷へと。互に別れ行く空の定めなき身の其上に。又の難儀を重ね行く是も浮世や。三へ世の中は

大磯の虎道行

ッ花に風よ。月に雲。是を障の種として。世の憂き事を数ふれば我身一つに止まりぬ。思ふに別れ思はぬを。ッ暫しが程の暫し間も。妻と仇名を立てられて。行くかひもなき道のべの。ッ草木は。人を。誅らねど、ッ下の心は。恥かしや。眉なし顔の初姿。髪も衣裳も町風に。淺黄被衣の追風は。腰のかゝりぞあらはなる。縹子の黒きを前帯にしやんと小棧の脛高く。紅粉を素足に透き通り残んの雪は。氣おされて。邊まばゆき面影や。今日の身請を限りぞと。長跡振返り眺むれば心に染まぬ仇波の立ち隔たりて大磯も。見えすなり行く里端れ。柳繩手に。霞の絶えほのかなる。春日の。小野の下蔭や。雪消の澤に袖濡れ

て。根芹ネギ橋ハシとの市女笠シメズ、フシア、よい振り
の小娘や。げに爰こそよ名にし負ふ中村
の里なりけり。女子育ちの華奢所オホしよどろ。スズテ
曾我の里へも程近し。歌祐成様の人目忍
ぶの通ひ路に。裙オビも袂も引磨かせじ。フシ
妬ましと。思ふ心の戀風も末は眞東風と
吹き變る。花の下行く風と呼はるな過ぎ
よ只。歌妻は廓くらに我鎌倉へ。櫻。花かや
散り。ぢりに。花かや櫻。ナホス 櫻花かや
フシちり／＼に。なるを咎めな。關許せきもとの。
明けなば君に逢ふしまあるまいものか
などで斯く。渚なみの浦の沖つ雁かり去に残りて
や。鳴く音なるらん我も。上うへべは歎か
ね。ど。フシ心までくる憂き涙。とゞめ兼
ねつゝ行末は露の松山。滴りて下は香を
吸む。梅澤の水を掬ひて。伏拜む神根深
き。杉の森。春時鳥若しやとて。フシ心を
澄ます折柄に。落葉おちば揺く子の聲々に。
歌茅花チヂミ買へとての。取付く袖は。振りの

長いが目立つものよノホ、ニホ。伊達
な染色二重ふたへがた。洲崎すさきに女波打つ所。ズ
ント優しい形振かたち。そなたは何處へ。脚躑
の山路やまぢへ花折賣りにく。花賣りく花
折賣りに。走りく走り着いたはざ。フシ
アいたいけや。若松の原。風越えて露を
拂へば起き直る。枝と枝とを引寄せ締め
寄せ。道の柴折戸しばしきと結び置く。解くと色な
い。人に解かれな。我下紐しもぢは幾夜いくよかも。
變る枕にほどけども。お宿底やどそこの。心は。君
なら。で。解けて寝し夜はなきぞとよ。
たまに逢ふ夜の夢をさへ。スズテ金にさけ
られ別れには。フシ残る言葉もありや無
し。泣いて別るゝばかりかは。明日あすの知
らせを待乳山花まちちやんはなけれど。憎からぬ人
の。みたちの見ゆるにぞ暫し／＼と。託
けて。袂たもとに重く痛む童誰わらわが色濃くや。染め
にけん。岨さへの早蕨はやわづら手を上げて。人の裳もも襦じゆ
をあれ／＼いたづらな。まだ若草の

しどけなく、フシいもが根根を。越え／＼
てそれで名の立つ戀草こいぐさや。汝なれが戀路こいぢはせ
めて扱つか。フ露と疑し夜の別。汝はも。朝
日待つ間はあるものを。アノ怨めしや。
憎にくてしや。歌平塚ひらつかの鳥は。時知らぬ鳥で。
眞夜中に歌うて。君を戻すしゆらへ。眞
夜中に歌うて。君を戻すしゆらへ。眞
鳥に代りて。憂き涙とゞめ兼ねたる身の
辛くるしみさ。婦人に包めば誰に斯く語り慰む事
もなく心一つを道連れに。程なく今日も
黄昏たそがれれて一羽鳥を。追うて行く鐘の鳴る
音ねと諸共に埴生ははひの。渡りに着き給ふ

第四

月つきは名のみ雨あめ借か一村黒き松の影。夜
半よぢの風と吹き狂ふ心の劍けん抜きつれて。少
將しょうを始め曾我我主そががぬし従したが。フシ左右に分つて待ち
かけたり。鶯うす斯くとは知らで三浦みづらの與一
前後ぜんごのつき／＼人数にんずを揃へ。道よりわざ

と目を暮らし。どれにどれたる鎌倉入り
フシ人も無げなる有様なり。團三郎眞先に
駆出で。それへ通られ候は三浦の興一
候な。是に待ちかけ候は平相國清盛の郎
等。伊賀の平内左衛門が獨姫豊と云ひし
を忘れしか。おのれを討たん其爲めに今
は拙なき流れの女。假粧坂の少將同家來
粟矢の三太。主の敵親の敵遣さぬ返せと
呼はつたり。與一驚き振返り。ナニ平家
方の斬り残され。某に恨みありとて是迄
來る優しさよ。定めて無常のやうすが吹
いて扱は命が腐ると見えたり。地を手を下
す迄もなしアレ蹴散らせと云ふ程こそあ
れ。切つてかゝれば人々は捲り立て殿り
立て命を。限りと三へ切り捲る。太刀
風にや襲はれけんむら／＼ばつとぞ逃げ
てける。隙を窺ひ虎御前大道を横切れ
に。小笹掻き分け退きければ。小衣さぬ
たも跡を慕ひフシ逃げて形はなかりけり。

與一は餘り手強く追はれ。跡を防げと
云ひも敢へず大藤内が肩にかゝりて逃げ
のくを。さもし穢し返せ。戻せと氣息
をもつかず斬つて廻れば。主従共に跡
や先逃げて行方は暗き夜や。雨はそぼ降
る風打ちしきる心ならずも人々は。又重
ねてと引く杖直ぐに繋して袖笠に。雨を
凌ぎて木の許を頼むばかりに。見え
にけり。爰に河津が。同子に禪師坊
と申しつゝ。越後の陸上にありけるが。
父祐重の十三回忌を心掛け。先つ頃より
寺を出で今此里の月邊に。雨の時間を待
つ露の。草折り結ぶ竹柱。葦の簾
に川越えて。心。涼しき法の庭。花が
なければ風も厭はぬ姿かな。一壁には達
磨の尊像拄杖に拂子並びに木魚。線香の
燻りほのかにて。琉璃燈の光影細く。
手向くる花に色もなく。柳櫻の。掴み挿
しは禪林の莊嚴なり。落日を受くる窓

の前には文机を構へたり。枕のかたの炭
櫃をば。柴折り。くぶる縁とす。庵の外
面に少地を占めあばらなる姫櫃の。内に
園あり。閻伽棚あり。笈流れて。水清
し。谷繁けれど西は晴れたり。觀念の
便りなきにしもあらず。春は藤波を見る
事紫雲の如し。夏は繁みの時鳥。語らふ
毎に死出の山路を契るなり。秋は茅蜩耳
に満てり。空蟬の。世を悲しむと思ふ
迄。皆法心の仲立なり。冬は又雪を憐
れむ。積り消ゆる様を思へば是非障に喩
へつべし。折に觸れ時に觸れ物の哀れの
多ければ。信心暫しも止む事なし山居の
一徳はなんめり。少し心を樂しむも世の
憂きふしと切竹の。音に惹かれつゝ小衣
やさぬたは手々に取組みて。扱は庵あり
こなたへと。鹿ならずしもこがれ寄る道
の。草葉や。答めなん。柴の櫃に。
立寄りて少し頼みませう頼みません

と聲々に訪づるれば。法師驚き出で給ひ。誰人なるぞとありければ二人の女聲を揃へ。いかにも様子を語り申さんさりながら。遺跡より追手のかゝる者殊更雨も防ぎ難し。先づ頼むと歎くにぞ。是非に及ばぬ戀の宿オクリ暫しへとてこそ通さるれ。禪師座敷に居直り。さるにても方々はこゝら目馴れぬ女子ども。いかなる故のありけるぞ語れ聞かんとありければ。増さん候我々は摩の者。附き参らせし太夫様さる御方の身請にて。あの里をお出であり塙生の渡しの邊迄今日黄昏に入り給ふを。太夫様の間夫男十郎様と申せしが。待伏せをし給ひ奪ひ取らんとし給ふが。程なく喧嘩に取結び太夫様も行方なし。自らとて此仕合せ。定めて敵の侍ども追付け尋ねに参るべし。影を隠して給はれとヌテ泣くより外の事ぞなき。法師はつと思はれしが。

さあらぬ體にて小聲になり。十郎とは誰が事ぞ若し曾我の十郎祐成にてはなきか。ア、よくも御存じ候者かな。虎様とは仲よくて死なば一緒と云交し。又二つなき御仲廓に隠れなきぞとよ。扱御亭坊様もお近附きかと云ひければ。流石それとは名乗られず。中々惡意に語るとあれば。扱々嬉しや此上はともかうも能き様に。ぬし様頼みさぶらふなりどうぞして我々を。十郎様へ送りてたべ太夫様に逢はせてたべコレナウ拜みますると手合せてこそ居たりけれ。禪師心に思はるゝは。扱も兄の悪性者大きな事を仕出したり。併し餘所に見捨てもやられじと。思ふ心の可笑しさをじつと堪へてのたまふ様。必ず方々氣遣ひあられな。愚僧が斯くて候上は心安う思はるべし譬へば瘦侍の五十や百蝶の文とも思はぬぞ。若しも伸張るものならば片つはし張り碎いて。いづ地へなりとも立退くべしそれく雨夜の淋しきに。茶を煮て飲まれよ食べ申さん。肘を枕も樂しひと。机に結ぶ夢の世をオクリ誰もへ斯くこそありたけれ。うたゝ寝たる。物語。きぬたはいまだ年行かす眠り倒けしを其儘に。袂の振りぞ枕なる小衣は目も合はず。小雨淋しき火の影につつくりとして居たりしが。勤めながらも色盛り禪師の寝顔になつむ目は小オクリ戀の。へ習ひや出来心。つれく見惚れて居たりしが。きながらそれとは言ひ悪し寝の悪きも作り事。そろりく倒け寄りて。左右の足を禪師にもたせ。手を打ち。掛くれば目を覺まし。エ、不便の者の有様や。暗き夜道を踏み迷ひ疲れ臥しける佛の。しどけなさよと衣持つて上へ覆へば小衣は。一つに寝ると心得て。寝た顔をして待ちけるは。可笑しくも又

羞かし。座禪してこそおはしけれ待てど暮せど小衣と。袖引く縁もあらざれば待つ甲斐もなき風情にて。差覗き見てければ一心不亂と坐し給ふ。小衣いと心憂くそれはつれなしさとては。枕一つの仇夢は覺めて詮なきものなるぞや。寢させ給へと打ちつけに。粹な仕掛けの私語を動する身のしるしなり。禪師暫し觀念あり。そも汝淺まし。僧を犯せし其科は四十九院の伽藍を焼き。佛の形を失ふより其罪多しと説かれたり。されば龍猛大士の宣はく。外面如菩薩内心如夜叉。いまはし。勿體なし。縦へば色を飾りても抑も人間は清からず。三百六十の骨を集めて人の形を取りたる。或ひは作れる家の如く。もろくの節支へ持ち四つの脈五百分の肉を普く廻り。六脈猶し相掛けて五百の筋を纏ひつゝ。

七百の細脈十六の粗脈。鏗り巡つて相連らね腸胃生熱の臟を纏ひ。廿五の氣脈猶そうげきの如くにして。百七の開恰も破れたる器に等し。五十七竅に不淨のもの充ち満てり。七重の皮を以つて是を包み五つの味を以つて是を養ふ。猶し一生飽く事なく貪る心絶えざるなり。腹中に五臟ありて葉々と相覆ひ。其形蓮花の如く孔竅空疎にして内外各相通ぜり。大腸小腸は赤白の二色を交じへ。廻り廻りて蠕れる毒蛇に似たり。又頭より趺髓より肌に至つて八萬の尸蟲あり。四つの頭四つの口九十九の尾先あり。此蟲人の死せんず時互に相食み食ふが故に諸の苦痛を受く。命終りし其後は塵に交はる土となる。西施が顔色忽ち白骨となつて郊原に朽つるが如し。此身は始終不淨なりとする所男女又隔てなし。智ある人誰が受着を殘さざらん。故に止觀に曰く。未だ此相を見ざる者愛染甚だ強しかや。中々迷ふ心はなし南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛とありければ。小衣にくれながらこは有難き御教化。いつの世にかは忘るべきア、南無阿彌陀佛と涙ながらに合掌す。煩惱即菩薩とは。つかゝる事をや申すらん。然る所へ藤内與一何時しか虎を奪ひ取られ。方方尋ね廻りしが若し此邊にや忍びつらんと。耳を峠で居たりしが藤内三浦が側に寄り。確か今のは女の聲御念佛の訝しき。正しく小衣が聲ならずやかたんに以つて不審晴れず。ヤレ庵室を踏倒し詮義をせよと下知すれば。元來思慮なき若黨ども我劣らじと樞を叩き。此内へ女三人附込うだり出せくと罵つたり禪師ハツト思はれしが二人の女を傍へに忍ばせ。心靜かに帽子を被り櫛の板戸を押開き。どなたかは存せぬが。近頃の難題左

様の事はいさ知らず。御覽の如く一人住みなる尼が庵。人かくまふべきやうはなし餘の御方を尋ねられよとありければ。

イヤサ慥に聲迄聞いて附込うだり。然る上は陳じても甲斐なき事。急いでこなたへ渡さるべしと無體に入らんとせし所を。七八人掻摺み庵の外へ投出し。小楯にとつたる小門の扉エイと云うて挽放し。八方微塵に打拉げば敢へて近附く三浦へ者ぞなき。三浦内藤肝を潰し。此尼は只者ならず只無二無三に斬込めと。追返せば蜘蛛の子のフシちり／＼にこそなりてけれ。今は是迄心安しかゝる所の長居は由なし。又も敵取つて返さば難儀の上の難儀なり。いさこなたへと連れて退く誠にいけなき墨衣。又戀衣重ねしは濡衣。とや名に立たん

第五

禪師坊圓月はきぬた小衣伴ひて。目差すも知れぬ夜の道いづ地をそこと定めなく。忍び／＼に尋ねたる時間を忘る春の雨。笠を除いて落つ露に袂絞りて玉障。かゝる折しも人々はおのが袖笠被きつれ。何心なく來られしが双方互に飛退り。何者なるぞと咎め合ふ時に祐成禪師と聞きつけ。圓月なるかとありければ禪師驚き振返りコハそもいかにと立ちながら。二人の女を渡しつゝありし事ども尋ねらるれば。されば候三浦の與一家來團三郎が舊主の敵。其上時致が忍び妻少將が親の敵。年來討ち度き所存にて我々を頼み候故。敵持つ身は互の事何とがなと思ふ折節。今日大磯の虎を請出し鎌倉へ入り候を。増生の渡しに待伏せし既に刃を争ふ所に。雨はしきる日は暮るゝ

敵討たせぬのみならず。剃へ虎が行方見失ひ斯様に方々尋ねるなり。互に戦ふ折柄心利きたる女なれば。敵の手を握潜り確かこなたへ参りしを。連れて立退き候がいつ方にてやはぐれけん。行末知れず候としほ／＼と語らるれば。禪師打領き。扱は今宵の暗き夜遅れて跡へ下りしを。知らで來たると覺えたり定めて遠くは行くまじきぞ。急いで尋ね申さるべし。併し此所は四つ矢近崎香取山口なんどて。道筋多き所なれば何れも手分け致さるべし。若し曾我大磯へなど志しなば跡へ戻りし事もあらん。何分山下宿が原十間坂にて出合ふべしと。其約束の道筋へ別れ。別れて行行く空の暗さは暗し。戀の闇路と踏み迷ふ心の外の思ひ草。わきて悲し虎御前人々を見失ひ。足に任せて行きけるが廓出てから直ぐさまや。歩み習はぬ道の末いづ地行くらん白

波の。立ちもやせめと恐しく、暫し佇み居たりしが。餘り氣息切苦しさに少し惱みを助けんと。側に臥したる荒熊を谷の朽木と思ひきや。腰を掛ければコハイカニむつくと起きて猛り出し。食らひ付かんとせし所をア、恐しと飛違ひ命限りと三度へ逃げて行く。熊はいよく怒れる氣色間なく隙なき一足飛び。既に間近くなりけれど影隠すべき便りなく。うろくとして立つたりしが、かしこを見れば大石あり。其堀跡に身をしどめ石を覆へば脱ぎかけの。袂ばかりが現はれてフシ憂身一つは恙なし。熊あなかしこと云ひけるはかゝる事を申すらん。課程なく熊は追駈け來り。熊衣の香を知るべにて堀り起さん。堀り返さんと穿てども少しばかりも動かねば。岩根を唾み巡りつゝ、行き方もなく失せてけり。熊折節山下宿が原唐が原の戻り馬。晴れ行

く空を幸ひに鞭を早めて歸りしが。先に進みし脊の權藏振戻り。やら不思議や此石のある所。殊更堀跡を打覆ひ女の袖見えけるは。押しに打たれて死にけるか但しは殺して埋めぬるか。いかにとしても不審晴れず。イデ引起して屍隠して得さすべし。汝等いかにと云ひければ残る馬子も是に同じ。熊いかにも權藏よく云うたり若し生きたれば彼奴が得。それ助けよと不便がる。フシ鬼の目にさへ涙なり。權藏得たりと手を差入れ。エイと云うて跳ね起せど。大盤石を押すが如くちつとも動く氣色なし。貫差の市まだるがり。ほつこしもない其處退けと。膝を屈して腰を伸す。地離れもせぬのみならず仰きにどうど伏す。して來いの八助蹴散らかし。コリヤほてつ腹。なかほこが淋しいか。常住あがる力石礫に打つて見すべいと。勢ひかゝつてむんずと抱

き。熊金剛力を出しエイヤ。エイヤと轟けども。フシ少し搖ぎもせざりけり。男の子ぬからぬ顔付にて。熊扱もく不思議なる事があるものかな。但しは脊の雨にて濕りしか。熊鬼角上げぬは口惜しく、かれくゝと力を合せ。三人諸共エイヤ聲して働けども動くべきとは見えざりき。馬子どもも肝を潰し是只事であるまじきぞ。熊若き者どもも呼んで來い上らぬ内はにじらぬと。聲々にわめきければ老若の別ちなく我もくゝと立ちかゝり。是は不思議と呷き合ひ。フシ指差す者こそなかりけれ。馬借の翁立出でて。いか様は不審晴れず。但しは神の咎めなるかいざ物試しに札を立て。熊往來の人に上げさせ事の様子を窺ふべしと。ありし次第を記し置き。宿所へ宿所に歸りけり。フシとある所へ。熊朝比奈は宿通ひの歸るさとて。供をも連れず只一人深編笠に高股

立。四尺八寸の玉丸十文字に横たへ。大竹を杖につき、鼻唄歌うて通りしが。爰に見馴れぬ高札あり。義秀不審晴れやらぬ星の光に差覗き。何々此石と申すは曾我の五郎時致と云つし人。酒匂川の水に浸り二所権現に力を請ふ。満ずる七日に水上より大石流れかゝりしを。思はずも取つて差上げ洲崎の石に打付くれば。二つに割れし石火の光不動の尊體現はれ給ふ。其後夜なく、蛇來つて紙れば元の如くなる。元來此所より出たる故爰に納めて是を奪む。然るに今宵堀跡に居直りて。下には女の小袖を埋む。所の者ども立寄りて死生を見んと。力を争ひ人数を選ふに更に動かす。若し往還に力者あらば。速かに事を糺し給ふべしとぞ書きてげる。朝比奈くつくと笑ひ出し。扱々五郎時致は大力なりと聞きつるが。是程の小石を上げんに二所権現をせがまし

ずとも。此朝比奈を頼まずして折角水を浴びけるよな。摩印地の礫によき手頃なる石なんめり。此義秀が腕には足らじイデ蹴散らして取らせんものと。弓手の足の親指にて跳返さん。跳返さんと焦ても中々動く氣色はなし。ワコハ口惜しと兩手を伸べ。エイヤくと大汗流して居たりけり。所へ十郎祐成虎が行末の知れざれば。心を置くに所なく憧れ尋ね歩きしを。朝比奈早くも見付け南無三寶恥かしや。義秀が力のたけ人に知られて叶はじと。義色すゝきが隈に身を隠してぞ居たりける。契り朽ちせぬ石の下衣の片袖臙けし。影に透して十郎は怪しや物のとよく見れば。色も模様もありしに違はずコハ口惜しや淺ましや。扱は討たれて死しけるな。不便の者の姿やとフシ平伏して。こそ歎かるれ。祐成漸く涙をとめ。今今は歎きて詮もなし。せ

めては空しき骸を隠し鬼にも角にもなるべきと。石引き起せば夢となく現ともなき面影の。物をも云はず縫りつく。虎は涙の雨やさめ。ぬれとは知らず朝比奈は餘り不審さ身を忘れ。顔差出せば十郎なりヤア祐成かと云ひも敢へず。吾殿は誰ぞ義秀殿。扱珍らしと打寄りてありし事ども語り合ふ。所へ時致禪師坊少將鬼王團三郎。一つになりて尋ね來り互にそれと見るよりも。是はとばかりなり。さて禪師坊朝比奈に向ひ。誠に舍見祐成事相扱川の憂き難儀。貴公の御情深き故危きを遁れし奈なさ。弟の時致も千萬有難く存するなり。愚僧は出家の事なれば思ふにかひも候はず。只兄弟が事どもを。宜しく頼み奉ると。涙と共に申さるれば。義秀も涙を押さへ御禮迄も候はず。御兄弟の事どもは父義盛を始めとし。秩父北條千葉

上總何れも懇意に存すれば。願ひも叶ひ申すべし必ず心安かるべし。併し少將敵討の事尤も五郎に所縁あれば討たせ度きはことわりなり。さりながら兄弟共に大事の身なれば構ひて助太刀無用たるべし。此上は某が思案を以つて。登城の折柄門前にて討たすべきぞ。人々は往來に打交り緩りと見物あらるべし。増さるにても此石の他の人の手に重く。祐成の手に輕きはいかに。是斯く申せば十郎は力劣りと云ふに似たれど。必ず心に懸け給ふな。某も時致程こそ候はね。關八州にて恐らく力は自慢たるに。是程の石得上げて歸る口惜しさよと怒りをなし。少し不興に見えければ虎恥かしげに立出て。主様の御力が全く劣るで候はず。是れをらは儼しく熊に追はれ。命危き折柄此石に影を隱し。二所權見に祈誓をかけ重きが下の石に臥す。袂残りし小夜衣我

夫ならぬ人の手に。構ひて上ぐる事勿れと約束堅き石の火。命較べて消ゆるとも色よき人の手には輕かれ。厭な男に上がるなと色を好みし一念の。凝り固まりし故なるぞや少しも心に懸け給ふな。女子の口から斯う云へば男自慢に似たれども。是れをらはが爲にはよい男それで命と言ひ残す。後の世迄も色好みの。虎が石とて旅人の口ずさみとぞ。三度へなれりける。時なるかなや。春色春過ぎて夏來にけらし更衣。祝ふや君が幾千年申し納むる日なりとて。在鎌倉の大名小名何れも登城ありけるを。朝比奈内通してげれば今日を限りと少將は。さもかひくしき姿にて、先に進みて出らる。是跡に續きし團三郎是も女に立立ちて。敵の油斷を窺ひける。オウリ心のへ内こそゆしけれ。大名小路を遙かに過ぎ義秀の門前にて。是は西國の女子ども。此所にて

親の敵に出合ひ只今勝負に及び候。身拵への程暫し御門前を貸し給へと。是帯締め直し禱かけ。小太刀拔連れ待ちかけたり。是斯くとは知らで三浦の與一四五十騎にて打つて通る。二人は向ふに駆塞がり。平相國清盛の郎等伊賀の平内左衛門が獨姫。豊と云ひしを忘れしか年來の親の敵。おのれを討たん其爲めに今は拙き流れの女。化粧坂の少將なり遁さぬやらぬと呼ばはつたり。與一からくと打笑ひ。扱もく野太い奴があるものかな。是れあれ打殺せと下知すれば同勢一度に追取り巻き。既に危く見えける所へ。紅の大口に鎧揺りかけ大長刀を横たへ。老女一人門を開かせつと出で。二人の者を後に圍ひ真中に割つて入り。さもし穢し方々よ。是は朝比奈の三郎義秀が母巴と申す女なり。承り候へば敵討と候に。女子二人中に取籠め尾籠の振舞ひ奇

怪なり。義盛も義秀も皆々御前に相詰めて留守は自ら預つたり。敵討の法なれば。若黨どもを退けて尋常に勝負あれ。

おのれ等びくとも動いて見よと八方に目を配り。仁王立ちに立つたりしは。恐しかりける勢ひなり。側へ寄りコレお袋。近頃はは無分別。彼奴は平家の餘黨なれば手々に翳め捕られてこそ。忠臣の妻とは云ふべけれ。平家方の肩持たるは但し義盛逆心なるかと云ひければ。イヤ狼狽へたるか與一殿。縦ひ平家の餘黨なりとも女は御免なさるゝぞ。勇め給へば少將も互に聲を込めくんと。勇め給へば少將も互に聲をかけ合せ火を散らしてぞ。何とかしけん。拂はれ。かしこにどうと伏し轉び刀を杖につく氣息も。絶ゆるばかりに見えにけり少將いとど心憂く。おのれ刀は立たず

とも食らひ付かんす勢ひにて捲り立て捲り立て。斬込み給へば眉の間を斬下げたり。與一も今は是迄と。蹴り立て。蹴り立つれば少將も馬手の高股斬拂はれ。裙は血汐に染みながら爰を最後と斬結ぶ。下紐に血傳ひ縫れてかしこへかつばと臥す。與一も眼は見えざれども少將に乗りかゝり。差通さん。差通さんとしてげれば。巴を始め曾我兄弟禪師坊も鬼王も。諸見物に打交はり遠く見る目に氣上りて。あれやくと身をもがきてこそ居られけれ。側へ伏したる團三郎呼ばはる聲にて心付き。眼を開きにじり寄り。與一が腋壺三刀刺し向ふへがはと突倒せば。少將むくと起き直り首討ち落せば和田の一派。前後を圍み遶りを拂うて圍へ行く道の道たる君が御代。猶萬代を重ねつゝ皆萬。歳を稱へける

右此本者依爲懇望文句音節等悉校合
加秘密令開版者也

竹本 義太夫 (壺印) 續義

京二條通寺町西入町北側

山本 九兵衛板 印

大阪高麗橋壹町目

山本 九右衛門板 印